

平成 22 年度～平成 24 年度

科学研究費補助金 基盤研究(C)

研究成果中間報告書

アイデンティティ形成に関する言語 教育とその教師養成・研修プログラ ムの実践的研究

(課題番号：22520540)

研究代表者：細川英雄（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

2011 年 8 月 30 日

はじめに

本研究の目的は、来たるべき複言語複文化状況に対応する新しい日本語教師研修制度の導入と確立である。特に、多文化共生社会における外国人学習者の量的増加と質的変容に対応する日本語教育として、まず学習者のアイデンティティ（以下、IDen）形成に関わる活動型日本語教育実践モデルを提唱し、それを実践する教師の養成・研修プログラムを開発するとともに、その制度的な導入をめざしたシステムの実施を図ろうとするものである。

近年、多文化共生社会での言語教育のあり方がさまざまな場面で問われている。たとえば、地域社会における生活者やその家族あるいは年少者の日本語学習においては、「構造シラバス」や「場面シラバス」といった旧来の方法が実際の現場で立ち往生しており、のみならず、大学や日本語学校の日本留学試験の受験対策でも、多様な環境から来る就学（志望）生を前に、日本語教育は右往左往している現実がある。

これを克服するために、戦後の日本語教育の歩みそのものに対する反省も踏まえつつ、ポストモダンによる教育パラダイムの転換を受けて、言語・思考を含めた生活経験の総体として学習者をホリスティックに捉える立場から、学習者の IDen 形成に関わろうとする活動型言語教育が、90年代後半から一部で論じられるようになり、21世紀に入って急速に広まりつつある。

しかし、この学習者の IDen に積極的に関わる活動型言語教育は、いまだ日本語教育界には普及・一般化していない。その原因として、次のような問題と段階性が指摘できる。

- (1) IDen の構築・更新の概念が抽象的で、わかりにくい。
- (2) 理念的には理解できても、具体的な教育活動の方法のイメージがわからない。
- (3) 自分なりにその教育実践を試みようとしているが、話し合う仲間もなく職場等で孤立している。

これまでに、本研究代表者および分担者は、各現場における活動型日本語教育の理論と実践の統合、および評価の方法をめぐって、学習者の IDen 形成の問題に常に注目してきた。とくに研究代表者および分担者が中心となって 2004～07 年に企画・実施した「実践研究フォーラム」（日本語教育学会主催）では、学習者の IDen 形成に関わる教育には、教育者自身の教育経験プロセス中での教育観の形成が不可欠であることが確認され、さらにその教育の質は、教育者自身の絶えざる自己評価に支えられることが明確になった（この成果は、「実践研究フォーラム報告」として学会ホームページに公開されている）。

いわゆる「留学生 30 万人計画」を控え、近い将来予想される日本語教員需要の爆発的増大から、教育・教員の質の確保が重要課題になることは目に見えている。世界的規模においても、言語圏を超えて移動する時代という社会構造の変化に対応した、言語教育者養成プログラムの開発・定着は喫緊課題である。ヨーロッパで主導されはじめた複言語・複

文化主義が、教育観・自己評価・制度システムを統合・構築するための思想であることを考え合わせると、日本にもこの流れの訪れることはもはや時間の問題であろう。

こうした状況を踏まえ、本研究は、来たるべき複言語複文化状況のための日本語教育として、IDen 形成に関わる活動型日本語教育実践モデルを提唱し、自己評価ツールの拡大による、その教師の養成・研修プログラムを開発するとともに、言語教育から教師養成・研修までを一貫した言語教育観・評価システムの下に構築することを試みる、WEB によるポートフォリオの実施によってその制度的な導入・確立をめざそうとするものである。

2011 年 8 月 30 日

細川英雄（研究代表者）

目次

はじめに

講演記録：

- ・ 言語教育における体系・能力・アイデンティティ
—総合活動型日本語教育の成立と変容

細川 英雄

論考と資料：

- ・ 言語教育においてことばと自己アイデンティティはどのように結ばれるのか
高橋 聡
- ・ 活動参加者インタビュー資料
張 珍華
- ・ 言語教育とアイデンティティの問題を考えるための文献案内
三代 純平
- ・ 総合活動型日本語教育関連文献

研究会記録